



Data

監督：陳凱歌（チェン・カイコー）
 出演：黎明（レオン・ライ）／章子
 怡（チャン・ツイイー）／孫
 紅雷（スン・ホンレイ）／陳
 紅（チェン・ホン）／王学圻
 （ワン・シュエチー）／英達
 （イン・ター）／余少群（ユ
 イ・シャオチュン）／安藤政
 信／吳剛（ウー・カン）／石
 曉滿（シー・シャオマン）／
 潘粵明（パン・ユミエン）／
 錢波（チエン・ポー）

👁️👁️ みどころ

陳凱歌（チェン・カイコー）監督が、京劇の伝説的女形梅蘭芳（メイ・ランファン）の波瀾万丈の人生に着目！

売りは、黎明（レオン・ライ）演ずる女形スター梅蘭芳と章子怡（チャン・ツイイー）演ずる男形女優孟小冬（モン・シャオトン）の異色共演だが、私の目は若き日の梅蘭芳を演ずる余少群（ユイ・シャオチュン）に。そのゾクゾクする色気には、きっとあなたもゾッコン・・・。

孫紅雷（スン・ホンレイ）、王学圻（ワン・シュエチー）そして陳紅（チェン・ホン）という陳凱歌ファミリーの名演技もあって重厚なドラマに仕上がっているが、さて『さらば、わが愛／霸王別姫』（93年）越えは？

また中国では大ヒット中だが、『三国志』ほど梅蘭芳を知らない日本での、興行収入における『レッドクリフ』（08年）越えは？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■中国で大ヒット！さて日本では？■□■

あなたは中国の京劇を知ってる？そして京劇の女形スターとして一世を風靡した梅蘭芳を知ってる？私は2007年10月の北京旅行で胡同（フートン）巡りをした際、広大な彼の（生前の）四合院（の前だけ）を見学した。1894年に北京で生まれ、1910年代から活躍を開始し、日中戦争の時代こそ活動を停止したものの、1920年代から50年代にかけて戦前戦後を通じて世界的に大活躍した梅蘭芳は日本でもかなり有名。もちろん、中国13億人民でその名を知らない人はいないはずだ。

そんな梅蘭芳の生涯に着目したのが、『黄色い大地』（84年）、『さらば、わが愛／霸王

別姫』(93年)等で有名な陳凱歌(チェン・カイコー)監督。

『さらば、わが愛／霸王別姫』以来15年ぶりに京劇を真正面から描き、撮影開始までの構想に3年を費やしたというこの作品は、2008年12月5日に中国で公開されるや大ヒット。ネット情報によると、上映10日間で1億元(約13億円)を超える興行収入を記録したとのことだ。呉宇森(ジョン・ウー)監督が私費を含めて100億円をかけて製作した『レッドクリフ』(08年)はPART1だけで全世界で数十億円の興行収入を挙げているはずだから、PART2が大いに楽しみだが、『花の生涯～梅蘭芳～』が中国でどこまで興行収入を伸ばすかは大いに見モノ。

もっとも『レッドクリフ』は日本でも大ヒットし、興行収入50億を記録したが、これは日本の若者も『三国志』を知っているため。さてそうになると、多くの若者が梅蘭芳を知らない日本でのこの映画の大ヒットの可能性は？

■□■レオン・ライの客観的な位置づけは？■□■

この映画の主演は、大人になってからの梅蘭芳を演ずるレオン・ライ。私が彼を観たのは①『インファナル・アフェアⅢ／終極無間』(03年)と②『SEVEN SWORDS セブンソード(七剣)』(05年)。

『インファナル・アフェアⅢ／終極無間』では、主演はトニー・レオンとアンディ・ラウ、そしておいしい役はケリー・チャンで、どちらかというとなレオン・ライはナンバー4の位置づけだった(『シネマルーム17』48頁参照)。また、私の大好きな映画で、「これぞ武侠映画！」としてエンタメ巨編の最高峰と位置づけた『SEVEN SWORDS セブンソード(七剣)』でも、レオン・ライは7剣士のうちの1人にすぎず、特別なリーダーシップを発揮しているわけではない(『シネマルーム17』114頁参照)。

北京市生まれだが、子供時代に香港に移住した1966年生まれのは歌手兼俳優として大人気を得たし、台湾金馬奨の主演男優賞も受賞しているが、私の評価では彼の客観的な位置づけは決してトップではなく、ナンバー2、ナンバー3という感が強い。

■□■私の目にはユイ・シャオチュンの方が■□■

陳凱歌監督は、なぜそんなレオン・ライをこの映画の主演に？それが私にとっては少し疑問。スクリーン上で見せる彼の梅蘭芳としての熱演はもちろんすばらしいが、それでも後述のように『さらば、わが愛／霸王別姫』のレスリー・チャンに比べると・・・？

そんな私が、「これぞ京劇の女形！」とゾクゾクしながら観たのが、梅蘭芳の青年時代を演じたユイ・シャオチュン。漢劇や越劇を学んでいるという1982年生まれのは、映画初出演で梅蘭芳という京劇最高の女形に挑戦したわけだが、これがすばらしい。

この映画は2時間27分の長編だが、その3分の1を占める前半50分間で彼の魅力が満喫できる。彼の師匠が後に述べる王学圻(ワン・シュエチー)演ずる十三燕(シーサン・

イェン)で男役の彼も見事な京劇の男優ぶり。しかし、私があんなにゾクゾクと色気を感じた名女形のユイ・シュオチュンとワン・シュエチーが対決したら、やはり若くて魅力的な梅蘭芳が勝つのは当たり前だ。

この映画の主役は後半3分の2に登場するレオン・ライだが、私の目にはユイ・シュオチュンの方が魅力的・・・。

■□■チャン・ツイイーは、レオン・ライに並ぶ主役? ■□■

この映画では、京劇界きっての男形女優である孟小冬(モン・シアオトン)を演ずるチャン・ツイイーがレオン・ライに並ぶ主役として位置づけられている。たしかに女優が男形を演じ、男優が女形を演ずるというのは究極のお楽しみかもしれない。また、それを売りにした2人のデュエットによるイメージソングによる大宣伝も理解できる。しかし2時間27分のこの映画でチャン・ツイイーが登場するのは中盤の約40分間だけ。『ジャスミンの花開く(茉莉花開/Jasmine Women)』(04年)でチャン・ツイイーは一人で茉(モー)、莉(リー)、花(ホア)の三役を熱演し、中国金鶏奨の主演女優賞を受賞したが、中盤だけの出番でレオン・ライと並ぶ主役という位置づけは少し疑問だ。

これはもちろん、今や世界レベルとなった彼女のビッグネームを活用したいという意図にもとづくものだが、それでは映画全編を通じて熱演した梅蘭芳の義兄弟となる邱如白(孫紅雷/スン・ホンレイ)や梅蘭芳の妻、福芝芳(陳紅/チェン・ホン)が少しかわいそう。

少なくともレオン・ライ、チャン・ツイイー、スン・ホンレイ、チェン・ホンの4人は同レベルの主役級として位置づけるのが妥当では?

もちろんこれは、孟小冬が男形の女優として、女形男優梅蘭芳と共演する舞台のシーンの価値を過小評価するものではないが・・・。

■□■この際『北京の恋—四郎探母』も是非 ■□■

外国人に日本の伝統演劇である歌舞伎がわかりにくいと同じように、日本人には中国の伝統演劇である京劇はわかりにくい。特に女形の役割はわかりにくい。そんな日本人に馴染みの薄い京劇を一躍日本人に知らしめたのが、男役の張豊毅(チャン・フォンイー)とコンビを組んで女形を演じた張國榮(レスリー・チャン)が注目された『さらば、わが愛/霸王別姫』だった。『花の生涯~梅蘭芳~』の上映を機に思い出してほしいのが、そんな『さらば、わが愛/霸王別姫』の他、『北京の恋—四郎探母—』(04年)。

これは、『さらば、わが愛/霸王別姫』に感動して北京電影学院に入り、トップの成績で同学院本科を卒業した日本人女性前田知恵が主演した珠玉の名作。また『四郎探母』とは、北宋時代の宋と遼の戦いによって遼の国に捕らえられ、鉄鏡王女に見初められて結婚した四郎の、母への思慕の念をテーマとした京劇。さて、前田知恵扮する橋本梶子(しこ)はどんなストーリー展開を経て鉄鏡王女を演じることに? また、中国人男優何鳴(ホー・ミ

ン) 演ずる四郎と橋本柅子演ずる鉄鏡王女の舞台がハイライトを迎えていく中、祖父が敵同士だったと知った鳴と柅子の恋の行方は？

『花の生涯～梅蘭芳～』の公開と合わせて、そんな『北京の恋—四郎探母—』の物語も思い出してもらいたいものだ。

■□■陳凱歌監督作品を順位づけすれば？■□■

作品の評価は難しい。しかし、絶対的評価が難しいのは当然だが、相対的評価は比較的容易。陳凱歌作品は、「中国ヌーベルバーグここにあり！」と全世界に知らしめた1984年の『黄色い大地』から2008年の『梅蘭芳』まで全13作だが、私が観た全9作を私なりに相対的に評価すること、つまり順位をつけるのは比較的容易。

しかして私の相対的評価では、上位から①『黄色い大地』、②『始皇帝暗殺』、③『さらば、わが愛／霸王別姫』、④『北京ヴァイオリン』(02年)、⑤『花の生涯～梅蘭芳～』、逆に下位から①『PROMISE』(05年)、②『大閱兵』(85年)、③『キリング・ミー・ソフトリー』(01年)、④『子供たちの王様』(87年)といったところ。

■□■『梅蘭芳』は『霸王別姫』を越えた？■□■

新作の宣伝のために「これがベスト！」とおべんちゃらを言うのは簡単だが、ネット情報によれば、大学教授で文学研究科の千丹氏は、『花の生涯～梅蘭芳～』を2008年度の最高傑作映画と評価しているらしい。そして「チャン監督の1992年作『さらばわが愛～霸王別姫～』は中国映画史上で誇れる作品の一つだが、『梅蘭芳』はさらに素晴らしい。人生がきちんと描かれている秀作だ」と絶賛しているが、さてこれはどこまでが本心でどこまでがおべんちゃら？

私の目には、たしかにあの激動の時代を生きた京劇の女形スター梅蘭芳を描いたこの映画は興味深かったが、チャン・フォンイーとレスリー・チャンという2人の男優に女優コン・リーを絡めてあの激動の時代を描くとともに、3人の主役の人間性に深く切り込んだ『さらば、わが愛／霸王別姫』のすばらしさは別格で、『花の生涯～梅蘭芳～』はそれには及ばないというのが私の評価。もちろん、こんな評価は人それぞれだから、反論があれば是非・・・。

■□■ストーリー構成の軸は？司法長官との出会いは？■□■

映画の冒頭、梅蘭芳が父親のように慕っていた伯父の梅雨田(メイ・ユィティエン)が皇太後の誕生日に赤い服を着なかったというだけの罪で処罰を受けるシークエンスが、陳凱歌監督作品らしい色彩感覚で描かれる。処刑され死んでいくこの伯父が幼い梅蘭芳宛に書いた手紙が、この映画全体のストーリー構成の核となっていくわけだ。

それから10年。清王朝が倒れ、中華民国となる中で青年となった梅蘭芳は、今や女形

の人気スター。そんな梅蘭芳が大きな感動と共感を覚えたのが司法長官、スン・ホンレイの講演。自信タツプリはいいのだが、それが同時に嫌みとも思える邱如白の講演は、古い慣習に縛られず、生身の人間を演ずるべきだという型破りのもの。この講演に京劇界の保守派や守旧派は猛反発したが、梅蘭芳は「会いたい」という手紙を送りつけたほどだから、大きな感銘を受けたことまちがいなし。

他方、はじめて梅蘭芳の舞台を観た邱如白はそのすばらしさに感銘を受けたが、その後の邱如白の決断が面白い。つまり京劇のそして梅蘭芳の魅力にとりつかれた邱如白は梅蘭芳と義兄弟の契りを結ぶとともに、いとも簡単に司法長官の地位も家族も捨ててしまったわけだ。もっともよく考えてみれば、邱如白はその後梅蘭芳の脚本を書いたり、公演のプロデュースをしたりという面で類まれな才能を発揮したから、もともと司法長官という職種には向いていなかったのかも・・・？

■名優、孫紅雷が全編にわたって味のある演技を！■

そんな興味深い邱如白役を演ずるスン・ホンレイは、①デビュー作の『初恋のきた道』（00年）で、同じくデビュー作となったチャン・ツイイーと共に鮮烈な印象を残した（『シネマールーム5』194頁参照）後、②『至福のとき』（02年）で小さな役で出演し、③『たまゆらの女』（02年）でコン・リーと共演してベッドインという幸運を手に入れ（？）（『シネマールーム5』245頁参照）、④『SEVEN SWORDS セブンソード（七剣）』でレオン・ライ以上の存在感を見せつけ（『シネマールーム17』114頁参照）、⑤『モンゴル』（07年）でテムジンの盟友（アンダ）であり、同時に宿敵となるジャムカを重厚に演じた（『シネマールーム19』150頁参照）名優。

もっとも1930年のニューヨーク公演は大成功させたものの、その後少しずつ義兄弟間の対立が深まっていったのは残念。そして、1937年12月13日に南京が日本軍に占領された時点で計画された梅蘭芳の南京公演をめぐって、その対立は決定的に。その対立原因が何かはあなた自身の目で見てほしいが、なぜ5代も続く官吏の家に生まれた邱如白がこれほどまでに京劇を愛し、梅蘭芳を愛したのかはじっくり掘り下げて考えてみたいところだ。

この映画全編にわたってこのように大きな存在感を示すスン・ホンレイの演技は、私の独断と偏見によれば、助演男優賞候補モノでは・・・？

■集結 その1 『黄色い大地』の王学圻が！■

『黄色い大地』（84年）、『大閩兵』（85年）と陳凱歌作品の1作目、2作目に主演したのが、1946年生まれの名優ワン・シュエチー。私が最近彼を観たのは『ヘブン・アンド・アース』（03年）だが、そんな彼も60歳を超える年に。

しかしそんな年になっても京劇の男形の大スター十三燕（シーサン・イエン）役を見事

に演じることができるのだから大したもの。その立ち居振る舞いの美しさと、梅蘭芳との師弟「対決」に敗れた後の潔い態度に注目！

■□■集結 その2 『北京ヴァイオリン』の陳紅が！■□■

『北京ヴァイオリン』（02年）では、陳凱歌の奥さんが女優として出演していると理解していたが、後にそれは逆だったことが判明。つまり、1968年生まれで高校時代に女優デビューし、日本公開作の『べにおしろい 紅粉』（94年）などに出演していた女優チェン・ホンと陳凱歌監督が結婚し、『北京ヴァイオリン』が彼女の結婚後の初出演作だったわけだ。『北京ヴァイオリン』のチェン・ホンは美しくリッチ、しかし退廃的で男をだましたり、貢がせたりすることを何とも思わない女リリという面白い役だった（『シネマルーム5』299頁参照）が、『PROMISE』（05年）の運命を司る神「満神」役はイマイチだった（『シネマルーム17』102頁参照）。

そんなチェン・ホンがこの映画では、夫の生き方を一方的に決めてしまう邱如白と馮子光（英達／イン・ター）との間で苦悩し、さらに夫が男形女優、孟小冬に心を奪われることに苦悩する梅蘭芳の妻、福芝芳役をしっかりと演じている。

アメリカ公演をはじめとして、男たちが一方的に決めてしまう興行のやり方に反発する福芝芳の姿は少しヒステリックで大局感に欠けるきらいがあるが、孟小冬の家で単身乗り込み、「夫と別れてくれ！」と迫るシーンは気の強い女同士の間で飛び交う火花が見えるような迫力。そしてそれは、チェン・ホンとチャン・ツイイーは私生活でも敵同士のような感じ・・・？

私の独断と偏見によれば、チェン・ホンのこの映画での演技はスン・ホンレイと同様、助演女優賞候補モノでは・・・？

■□■集結 その3 『さらば、わが愛』の英達が！■□■

『さらば、わが愛／霸王別姫』ではチャン・フォンイー、レスリー・チャン、コン・リーの影に隠れながら（？）劇場主役できっちり陳凱歌監督作品に寄与した太っちょの俳優イン・ターが、この映画に再び陳凱歌ファミリーとして参加し、映画全編にわたって大きな役割を果たしている。彼が演ずる馮子光は、梅蘭芳のプロデューサー役。当初は邱如白とのコンビが絶妙で2人で裏方をきっちり支えていたが、激動する時代の中、次第に梅蘭芳と同様、邱如白との仲が対立していくことに。

俳優は一目見て覚えられることが大切だが、名前はともかくその太った体型と愛嬌のある顔は一度見れば忘れられないもの。私がそんな1960年生まれの俳優イン・ターを観たのは、①フォン・シャオガン監督の『ハッピー・ヒューネラル』（01年）（『シネマルーム5』276頁参照）と②ジェイムズ・アイヴォリー監督の『上海の伯爵夫人』（05年）（『シネマルーム17』214頁参照）。『ハッピー・ヒューネラル』で中国百花奨の助演男

優賞を受賞した彼の、味のある演技をじっくりと。



『花の生涯 ～梅蘭芳～ スペシャル・エディション』
価格 ¥4,700+税 発売元・販売元 株式会社KADOKAWA 角川書店

■□■安藤政信がえらくカッコいい役を■□■

過去中国でたくさんつくられた抗日映画や、テレビで連日放映されている抗日ドラマでは、きっと日本軍は「鬼子」のイメージで描かれているはず。2000年のカンヌ国際映画祭でグランプリを獲得した姜文監督の『鬼が来た！(鬼子來了)』にはビックリさせられたが、何にビックリしたかという、それは日本軍(人)の狂気のサマ(『シネマルーム5』212頁参照)。それに比べるとこの映画における日本軍がえらく理性的なのは、やはり今や世界的名声を獲得した陳凱歌監督が日中友好に気がつかったせい・・・？

この映画の中で当時の典型的な日本軍人のイメージで登場するのは吉野中将(六平直政)。それに対して、えらくカッコいい軍人役で登場するのが、安藤政信演ずる田中隆一少佐だ。支那を支配するには、支那の文化を理解し受け入れることが大切。したがって、支那国民がこよなく愛する京劇を理解し、その女形スターである梅蘭芳に対しても敬意を払って接するべき。心の底からそんな価値観をもった田中少佐のような軍人があの当時存在したとは容易に考えられないが、彼が流暢にしゃべる中国語は敵国の情報を仕入れるための武器ではなく、真に支那とその国民を理解するための道具だったようだ。

したがって、1937年に北京が占領された後京劇の舞台から去った梅蘭芳を日本軍の南京占領を祝うために出演させることは、吉野中将にとっては占領政策上の手段。しかし田中少佐の価値観は、どちらが戦争に勝とうが京劇は続くべきだし、女形スター梅蘭芳は生き続けるべきだというもの。

したがって、ヒゲをたくわえ、チフスに罹患した(?)梅蘭芳の登場によって南京での公演がダメになったとわかったときの吉野中将と田中少佐の失望は共に大きかったが、その意味は全く違うものだった。「どんな手段を使ってもいいから梅蘭芳を出演させろ」という吉野中将の命令に抵抗し、京劇と梅蘭芳の尊厳を守ろうとした田中少佐が選んだ究極の選択とは・・・？

■□■梅蘭芳の舞台復帰はいつ？■□■

①清朝の滅亡と中華民国の成立、②日本の侵略と日中戦争の開始、③日本を駆逐した後の国共対立と新中国の建国、④毛沢東による文化大革命の悲劇という激動の近代中国史の描き方とチャン・フォンイー、レスリー・チャン、コン・リーの3人の主役の掘り下げ方においては『さらば、わが愛／霸王別姫』の方が『花の生涯～梅蘭芳～』より上。しかし、京劇の魅力そのものの見せ方ではこの映画も負けてはいない。特に前半50分の青年期の梅蘭芳が見せる師匠「対決」での魅力的な舞台や、レオン・ライとチャン・ツイイーとの男形、女形逆共演の舞台がこの映画の売り。

しかし、1937年に日本軍が北京を占領し、梅蘭芳が京劇の舞台を去った後は、中国人民や田中少佐らと共に私たちも梅蘭芳の舞台を見ることができなくなる。つまり後半の

3分の1は京劇の舞台なしの人間ドラマがぎっしり詰め込まれているわけだ。そんな中で高まってくのが、再び梅蘭芳の舞台を観たいという飢餓感。さて、そんな私たちの期待を受けて梅蘭芳が舞台に復帰するのはいつ・・・？

2009（平成21）年1月19日記

74



「花の生涯～梅蘭芳～」

（今日からなんばパークスシネマほかで公開）



「陳凱歌と京劇」再び世界へ！

中国第五世代ニューウエーブは、文化大革命の終結により一九七八年に再開された北京電影学院の第一期生、陳凱歌監督の『黄色い大地』（八四年）に全世界が衝撃を

受けた時から始まった。九三年の傑作『さらば、わが愛／翹王別姫』に続いて彼が挑戦したが、中国人はもちろんだ日本人にも有名な京劇の女形梅蘭芳の生涯。伝統に固執する師匠との対決に勝つた梅の国内での活躍は、明治から大正に掛かる一〇年代から始まる。訪日公演も一九年と二四年の二回。しかし時代は激動

中、「誰が戦争に勝とうと梅は生き残るべきか」と主張する田中少佐（安藤政信）が企画した南京公演は？ 社会性あるテーマはこの二つだが、梅を支え続けた妻福芝芳（陳紅）と孟との確執、司法長官の地位を捨てて義兄弟の契りを結び、生涯梅のブレン役となった邱如白（孫紅雷）と梅との確執。梅の舞台を核としたこの二つの人間ドラマも奥が深い。

魅力に、思わずゾクッとした。事前の酷評と大恐慌の中大博打を打った三〇一年のニューヨク公演は？ 戦火が激しくなる中、「誰が戦争に勝とう

期。三年の柳条湖事件、三七年の日中戦争開始が間近に。中盤の見せ場は、黎明演ずる円熟期の梅と章子怡演ずる京劇界きつての男形女優孟小冬との男女逆転の共演。本作の大ヒットは、二人のデュエット曲が前宣伝で活用されたため？ 私のイチ押しは、若き日の梅を演じた余少群。若い時から漢劇と越劇を学んだ八二年生まれのイケメンが演ずる女形の妖しい

大阪日日新聞 2009（平成21）年4月11日